

# 色染物質会

## 会誌第7号

### Index

ページ		ページ	
1	会長挨拶	20	クラス会だより S35年
2	京都の史実・6	21	クラス会だより S37年
6	奈良のこと・6	23	クラス会だより S38年
9	繊維と共に60年の回顧・2	25	クラス会だより S45年
14	句集「徒然に生きる」より	26	クラス会だより S50年
15	「妙法」の夢	27	クラス会だより S53年
17	クラス会だより S29年	29	会員名簿
18	クラス会だより S31年	31	編集後記
19	クラス会だより S33年		

2016年4月発行

## 第6回総会を迎えて

色染物質会の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

皆様のご協力のもと、当会も5期を終え、6期目を迎える運びになりました。別紙にご案内のように、来る6月4日（土）に第6回総会及び懇親会を昨年と同じホテル、メルパークで開催いたしますので、多数ご参加いただきますようご案内かたがたお願いいたします。

第5期の行事は総会、懇親会、新年会、ゴルフコンペ、会誌発行、HPの更新、新会員の勧誘等を計画どおり実施いたしました。散策会につきましては参加者が少数に留まるようでしたので、実施に至りませんでした。

決算面では通信費がメール便の廃止に伴い郵便局に切り替えましたところ、会誌の発送単価が嵩み高額の出費を余儀なくされましたが、印刷費、会議費等の減少の結果、繰越金は昨年とほぼ同額に収まりました。

会費の受領状況ですが、受領率が前期60%から今期66%へと若干改善しましたが、目標の70%には及ばず未達に終わりました。未納入者の固定化が見受けられますので来期は是非納入いただきますようお願いいたします。

来期は役員の改選期になります。現役員体制は一部の変動を除き5年間継続していますので、役員の若返りを念頭に新体制を検討し来る総会に提案する予定です。

会員勧誘ですが、昭和30年後半～40年台の卒業年度の内、加入者の少ないクラスを対象に加入勧誘を行った結果、16名の入会者があり予期以上の成果を収めることができました。来期も昭和50年以降の卒業年度を対象に勧誘作業を継続する予定です。

皆様方にも会員勧誘にご協力を賜りますようお願いいたします。

平成28年4月吉日

会長 佐藤忠孝

## 知ってるようで知らない京都の史実 No.6

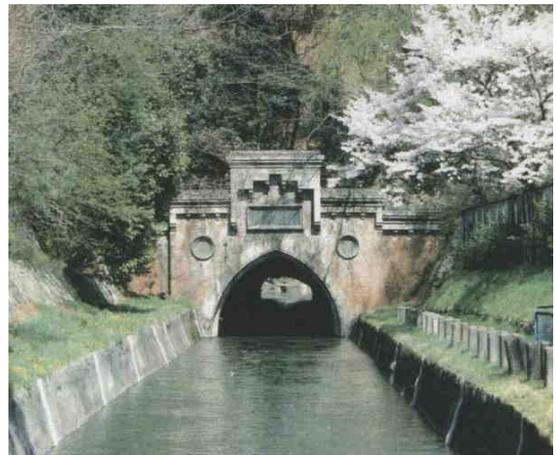
### 琵琶湖疎水工事は何故始まったのか？ その2

#### \* 北垣京都府知事着任前後の世相 \*

北垣が京都府知事に着任したのは明治14年1月ですが、その前後の世相はどのようなものだったのでしょうか。明治10年に西南の役が起こり、西郷隆盛は亡くなります。翌年内閣の中枢人物だった大久保利通が暗殺され、世相は混乱に逆戻りしそうになりました。禄を失った武士階級の処遇問題が大きくなり始めていたのです。

それを解決する一つの方式として、新政府は《安積疎水》続いて《那須塩原疎水》を着工します。原野を開拓して、耕地を作るのが目的でした。ここへ禄を失った武士を入植させようという狙いです。この延長線上に《琵琶湖疎水》もあり、国家事業の柱にしようとしていたのです。

他方鉄道建設は日本各地で施工が始まっていますが、これは大部分が民間企業としてはじまっており、救済にはあまり役立ちません。武士階級だけでなく、京都や会津若松のように明治維新の戦乱で荒廃した都市の住民の救済も図らねばなりませんでした。



#### \* 滋賀県から猛反対を受ける \*

北垣が提出した《琵琶湖疎水計画書》をみて、当時の滋賀県令《籠手田》は猛反対を唱え、中央政府に働きかけます。実は安積疎水でも若松県が反対していました。しかし若松県の住民を優先的に入植させる方針を掲げ、福島・若松・磐前三県を《福島》に合併させ、計画を推進させています。

《籠手田》いわく、滋賀県にとっては水を抜かれるだけで、何の利益もない。京都だけが受益するというのです。その他にも当初65万円と見積もられていた建設予算が120万円と、倍近くなった事に京都府議会から着工反対の声が上り始めます。

《琵琶湖疎水計画書》の主目的は、東海・北陸・近江地区からの京都への物資搬入には逢坂山という難所があり、これを船便に変えるということがありました。だが東海道鉄道が完成間近、大津と京都間は北垣が知事に就任する前後に開通しています。この工事の最大の難関とされている《長等山遂道》のすぐ近くにある《逢坂山遂道》は完成していました。

琵琶湖疎水では六つのトンネルが計画されていました。その内の《長等山遂道》は総延長2436mで、当時の我国では最長のトンネルです。《逢坂山遂道》は665mで日本人の技師だけで既に成し遂げられているのに今更大金を投入して何のためになるのか、が滋賀県側の反対理由でした。

これにより物資輸送問題はあまり説得力がありません。しかも増加した建設予算は全て京都区民の負担になるという事でした。

#### \* 手段と目的は異なる… \*

北垣京都府知事が目指したのは《官民一体となって疲弊した京都を活性化させる事》であり、琵琶湖疏水計画はその手段で目的ではないのです。それを遂行するための気力・胆力に加えノウハウも彼は持っていました。彼を支持する政府の大物達のバックアップです。



滋賀県令籠手田は、明治 17 年突如更迭され、元老院議官に転任されます。云うまでもなく、北垣の支持を進める中央政府の思惑の結果なのでしょう。府議会にも強力に推進を諮り【一旦男がやると決めたらとことん最後までやり遂げよう…】という有名な演説をぶち抜き説得に成功しました。この考え方を堅持したからこそ、その後の上水道工事敷設に伴う第 2 疎水工事や水力発電装置増強、市営電気鉄道の敷設、市内道路の拡張等が可能になって行くのです。

## \* 琵琶湖疏水着工 \*

紆余曲折のあと、明治 18 年（1885 年）6 月工事は開始されます。この工事は本格的な西洋技術を取り入れる最初の国策工事としての位置づけでした。先進技術を受け入れながら全て日本人だけで完成させるのがその目標だったのです。

工区は五つに分けられ、全線をほぼ同時に完成させるため、最も難航が予想される第 1 隧道のシャフトから開始されました。このときから初めてダイナマイト、工事用トロッコ、排水ポンプ、送風機などが使われたとされています。第 1 隧道に採用されたシャフト工事は、安積疎水でも採用されていますが、佐渡金山で既に開発されていた様式とほぼ似ており、明り取りと換気が主な目的でした。



トンネル内部や橋梁に使う煉瓦が大量に必要なため、レンガ工場を山科の御陵に作っています。レンガは明治 19 年 7 月から製造開始し、23 年竣工までに約 1400 万個作られていたそうです。

工事の途中、田辺は明治 21 年渡米、米国ホリヨークで始まったという水力利用の通船運河の状況を、高木文平という市の議員と一緒に見学にでかけます。しかし、これは規模が大きすぎとても参考にならない事が判明しました。

ここからが田辺の真骨頂が始まります。米国アスペンで小規模ながら世界最初の水力発電が始まっている事を、田辺と同じ工部大学校出身の中野初子（ハツネ）の論文で知っていました。高木と田辺は躊躇することなくアスペンの鉱山まで見学にでかけます。アスペンでは突然訪れた日本の二人に驚き、大歓迎しました。そして余す所なくこのシステムの詳細を二人に教えました。

コロラド州アスペンで水力発電を検分の上、このシステムの優位性を確認します。帰国後計画を一部変更し、蹴上に日本最初の大規模な水力発電所の建設を始めました。以後この発電設備が疎水運営の【柱】の一つになります。

この電力を使いインクラインを動かせるように建設しました。又、この電力を使い日本最初の電車を市中に走らせたのです。琵琶湖疏水は明治 23 年 4 月 9 日、天皇皇后両陛下をお迎えして盛大な完成式を行います。電力を使ったインクラインが実際に動き始めるのは 24 年 11 月からでした。施行費用総額 125 万円余（現在の貨幣価値に直すと 1 万倍、125 億円）の大工事はこうして完成したのです。

## \* 第2疎水工事をご存知ですか？ \*

第2疎水があるのをご存知の方は殆どありません。筆者もこの記述のため資料を色々調べるまで、殆ど何も知りませんでした。実は松ヶ崎浄水場は第2疎水工事なのです。明治35年に敷設が承認されましたが、資金難でようやく明治42年になって取り掛かった工事でした。先に完成した運河に沿って流れていますが、地中に埋設されているので目につきにくいのです。



先の疎水運河は完成しましたが、工事の目標が途中から微妙に変わってきています。琵琶湖経由の物資搬入は、鉄道に取って代われようとしていました。

琵琶湖から水はきたものの、何のために巨額の費用をかけてまでしなければならなかったかが、非常に曖昧になってきていたのです。しかもこのまま此処で工事をやめてしまったのでは、折角盛り上がりかけた《京都の活性化》が翳ってしまいます。折からとんでもない朗報？が入ってきます。トルコ軍艦エルトゥール号のコレラ事件でした。この当時東アジア各地にコレラが蔓延し、日本でもその予防対策が叫ばれていたのです。この事件で横浜に来ていた外国船乗組員にも感染がひろがり、多数の人達がコレラに罹って死亡します。日本各地にも伝染が拡大し、数万人の死亡者と報告されていますが、一説ではこの年前後の10年間に死者11万名余ともいわれていますが正確な数は不明です。

トルコ軍艦エルトゥール号は、その後帰国途中和歌山県沖で台風に遭遇し沈没しますが、このときの生存者は64名余、500名以上が死亡する外国船の海難事件になり当時の新聞を賑わす大事件になりました。

コレラは水を媒介して蔓延する事が知られていました。当時飲み水は京都では全て井水でしたが、検査した市中の井水7千件余の60%以上が不合格となったのです。俄かに上水道が不可欠になってきたのです。完成した疎水の水量では不足することが明らかになり、どうしても上水道のための新たな疎水工事が必要になってきました。ここにきて疎水の目標の一つが飲料水の確保に加わります。また、電力の有用性は利用が始まると同時に認められるようになってきました。

上水道を市中に敷設させるには、浄水場が必要です。明治25年以降京都市の目標は第2疎水工事と水力発電所の増強と変化して行くのです。やっと根付きかけた市中の活力を持続させるには、《上水道の敷設》《道路の拡大》《電気軌道の敷設》を【京都三大事業】として掲げねばならなかったのでしょうか。こうして出来上がったのが、第2疎水であり、蹴上：松ヶ崎：九条山浄水場だったのです。

## \* 西郷菊次郎の登場 \*

明治25年7月、北垣は鴨川運河めぐり京都市議会と対立し辞任、北海道へ転任してしまいます。浄水場を建設するには伏見と松ヶ崎までの運河を敷設する必要があり、この運河が原因でした。これまでの疎水工事は沈滞の底に喘いでいた京都に色々な面で活気を蘇らせたのは確かでした。明治31年には人口が35万を越え、なお毎年1万ずつふえ続ける状況では、飲料水の確保が限界に達していたのです。

やっと根付きかけた活力を持続させ強化するには、なんとしても更に多量の水を確保する《新しい疎水の掘削》が望まれたのです。【京都三大事業】は明治35年市議会でも可決

承認されましたが、この実現にも大きな障害がありました。資金がないのです。最初の疎水工事の債務が未だ解消されておらず、【京都三大事業】の見積予算 1700 万円等到底調達できる状態ではなかったのです。

ここで明治 37 年 10 月、2 代目市長に就任した西郷菊次郎が登場します。彼は西郷隆盛の長男で、明治 5 年 2 月 11 歳で米国へ 2 年間留学しました。西南戦争では父と共に参戦しますが年少のため許され、勝海舟や有栖川ノ宮、伊藤博文らの支援を受けていました。

明治 17 年外務省へ 23 歳で入省、20 年 6 月再度米国へ留学します。その後数々の職を歴任して 35 年末に退官しましたが、このとき京都市長への布石がなされていたようです。国際感覚に明るい西郷市長は【京都三大事業】実現のための資金調達を外債に求めます。様々な根回しの後、フランスの二つの銀行から有利な条件で融資を受ける契約に成功しました。時あたかも日露戦争終結の直後です。日本の国際的信用が高まっていたからこそ実現出来たのでしょう。

第 2 疎水建設計画は 41 年 2 月認可:同年 11 月着工、3 年 6 ヶ月の工期を費やして、明治 45 年 4 月無事竣工するのです。この工事の特徴は飲料水確保の観点から、極一部を除き汚水の流入を防ぐため殆ど全てが地下に潜っているため、京都や大津の人達でさえその存在を知らない人が多いのです。南禅寺の地下を潜り銀閣寺から哲学の道沿い（この下に疎水）北西に向かい、高野川の下を潜って松ヶ崎浄水場に流れ込んでいるのです。また、蹴上以外に夷川と墨染（伏見）に水力発電所があることを知っている人は稀です。

第 2 疎水の完成と共に蹴上の発電所は 600Kw⇒4500Kw と増設され、新たに夷川 300Kw と墨染 2200Kw の発電所が新設されました。京都市電もこの電力により営業が可能になったのは云うまでもありません。上水道工事も旧京都市内全域に敷設が完成されました。



左側建物 夷川発電所（踏水会横）  
本物の水力発電所とは気付かない

京都市の水道は明治 45 年 9 月我が国最初の【急速濾過方式】として蹴上浄水場から給水が開始されます。当時の人口 50 万人の内、給水人口は約 4 万人でした。1 日の最大給水量は 3 万トだったそうです。現在の人口約 140 万で、最大給水量が 85 万トになっていますが、琵琶湖のお陰で給水制限になったことがありません。これも全て【第 2 疎水工事】が実現していたからなのです。

さらに、松ヶ崎で余った水は加茂川へ放水するのではなく、地下を潜って堀川の源流になっているとは、想像もしませんでした。この経路も殆どが地下なのです。

西郷菊次郎は市長退官までの約 7 年半の間に、この事業を殆ど完成させているのです。因みに当時の 1700 万円は（現在の貨幣価値に直すと 1 万倍、1700 億円）膨大な金額になります。この債務は昭和 6 年まで 1 度の遅滞もなく全て完済されています。

参考文献 琵琶湖疎水 S63.4 西岡良博 よもやまばなし琵琶湖疎水 2005.10 浅見素石

疎水を拓いた人々 1995.11.15 京都教育史サークル 琵琶湖疎水百年史 H14.4 京都市水道局

三大疎水と国家プロジェクト H21.9 月 那須塩原市那須野ヶ原博物館

（色染・昭 3 5 松尾秀明）

# 奈良のこと (古都)

## (6) 元興寺・ならまち

猿沢池の南側に「ならまち」があり、殆ど全域が元興寺の旧境内にあたる。奈良は太平洋戦争の時に空襲を受けなかったため、江戸時代以降の町屋が多数残っている。

奈良市では「都市景観形成地区」として、町屋の買い上げなどを行い保存に努めている。

この歴史的景観と、町屋の原型を保ちつつ現代風に改装された飲食店や雑貨店などで、今は女性を中心にした観光客の人気スポットとなっている。

### \*元興寺\*

蘇我馬子は588年に飛鳥で、氏寺として日本で最古の本格的寺院である法興寺（飛鳥寺）を創建した。日本初の屋根瓦を葺いた寺院で、百濟から呼んだ瓦博士の指導で焼かれた日本初の瓦は、今も数百枚が残っている。



平城京への遷都に伴い、718年に奈良に移り元興寺となった。奈良時代の伽藍は、南大門、中門、金堂（本尊は弥勒仏）、講堂、鐘堂、食堂が一直線に並び、講堂の背後には東西に数棟の僧房があった。

その後、1451年の土一揆で殆どを失い、残っていた五重塔も江戸末期の1859年に焼失した。衰退した蘇我氏に力はなく再興しないまま、民家が建ち市街地となっていった。

現在の本堂（極楽坊）と禅室は何れも国宝で、創建当初は僧坊であった。鎌倉時代に改造され現在の形になっているが、瓦や柱の一部は飛鳥での創建当初のものである。

本尊は「智光曼荼羅」で、天平時代の学僧智光が夢に見た極楽浄土の様子を絵師に描かせたもので、原本は焼失して無く、今は板絵（重要文化財）が残っている。

国宝の五重小塔は通常の十分の一の大きさに作られており、高さ5.5mと小型であるが、非常に精巧な作りから奈良時代の塔の構造がよく分かるといわれている。

境内には沢山の五輪塔や地蔵が祀られているが、すべて「ならまち」（旧境内）から出土したものだそうである。

### \*ならまち\*

元興寺焼け跡に出来た町のためか、迷路のような道が多く、ガイドの私たちでも道を間違えることがあるほどで、立ち往生した観光客に道を聞かれることも珍しくない。

ふるさとの あすかはあれど あをによし ならのあすかを みらくしよしも

大伴坂上郎女（万葉集 巻6-992）

元興寺が飛鳥から平城京に移ってきたとき、飛鳥を懐かしんで詠ったもので、この辺りを「平城（なら）の飛鳥」と呼んでいる。飛鳥小学校の呼称に名残を留めており、歌碑は瑜伽神社の一の鳥居から83段の石段を上った所と元興寺五重塔跡にある。

奈良時代から社寺の保護の下で商業や手工業が発展して来た町である。室町時代の土一揆以降、町民は自立をしてゆき、筆、墨、蚊帳、晒、布団、刀、酒、醤油などで、産業の町として発展する。江戸時代中期以降は、東大寺や興福寺、春日大社の門前町として栄えた。

明治になってからは、「ならまち」にも文明開化の波がおしよせ、牛肉店、洋髪の散髪屋、カステラ屋などができた。

「テイチクレコード」は大和蚊帳の富豪吉川嶋次の資金援助で、南口重太郎が設立した「帝国蓄音機株式会社」が始まりである。

#### 庚申堂：

ならまちの中心にあり、「庚申さん」と呼ばれている。庚申信仰の奈良の拠点であり、青面金剛像を祭祀する祠で、屋根の上には三猿が飾られている。

青面金剛の使いである猿を型取ったお守りは、「身代わり猿」と呼ばれ、魔除けとして町内の家々の軒先に吊るされている。大中小とあり、お土産に人気がある。

#### 五重塔跡：

江戸末期まであった塔は、寺伝では高さ73mといわれ、興福寺の五重塔と並び遠くからもよく見えたようである。今は基壇と礎石を残すのみになってしまった。基壇には大きな桜の樹があり、春には満開の桜と花びらに飾られた礎石が美しい。

#### 御霊神社：

奈良時代から平安時代に掛けて、政治の陰謀などで命を失った人の御霊・怨霊を鎮めるためお祀りしている。

井上（イガミ）皇后と他戸（オサベ）皇子（光仁天皇の皇后と皇子）

早良親王（崇道天皇）（光仁天皇第2子、桓武天皇の弟）（流罪、途中で死亡）

伊予親王と藤原吉子（桓武天皇の皇子と皇后）（伊予親王の変、二人は自殺）

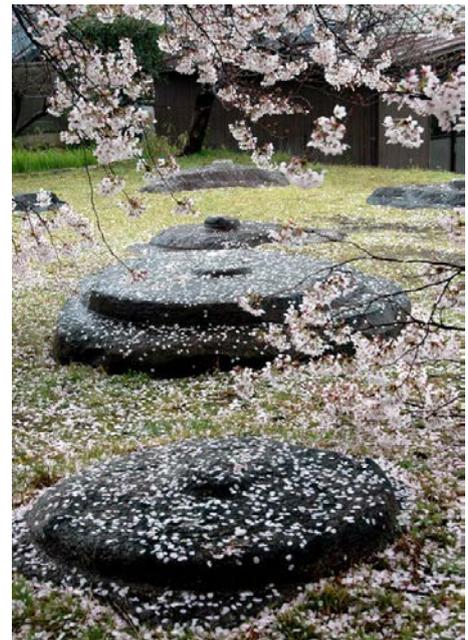
藤原広嗣（藤原不比等の孫：式家）（聖武天皇の時九州で反乱：藤原広嗣の乱）

文屋宮田麻呂（文大夫）（843年謀反の罪で流罪：後に無実）

橘逸勢（空海、最澄と同期の遣唐使、842年謀反の罪で流罪：途中で病没）

吉備真備（吉備大神）（遣唐使2回、二度目は鑑真を伴って帰国）

菅原道真（火雷神・天満宮の祭神）（藤原時平との争いに敗れ太宰府に左遷される）



## \*中将姫\*

中将姫は右大臣・藤原豊成（藤原武智麻呂の長男で藤原不比等の孫に当たる）の娘である。継母にいじめられ暗殺されそうになるが、大和国雲雀山に逃れ、その後当麻寺（たいまでら）に入り尼となった。

「ならまち」には、中将姫に関わるお寺が沢山ある。

**誕生寺**：中将姫の生まれたところで、父・藤原豊成の邸跡とされる場所である。

**徳融寺**：豊成と中将姫を祀る石塔が二基並んで建っている。

この石塔は元々高林寺にあったものが、1667年に移されたようである。

姫を題材にしたものは多く、謡曲「当麻」、謡曲「雲雀山」、浄瑠璃「ひばり山姫捨松」、歌舞伎「中将姫雪責」、歌舞伎「蓮華糸恋曼茶羅」などである。

歌舞伎「中将姫雪責」を上演する前には、役者がお墓に参るそうである。

**高林寺**：豊成の邸跡で、ここに豊成の墓（直径2.5mの円墳）がある。

また、本堂には豊成と中将姫の座像が安置されている。

墓の前に白牡丹の木があり、中将姫ご縁日の4月13日には、その年の寒暖に関係なく、不思議にも必ず美しい白牡丹の花を咲かせる。

### 中将姫の伝説：

姫は輝くばかりの美貌と才能に恵まれ、和歌や音楽の才能にも優れていた。継母の照日前はこうした姫を憎み、11歳の時、豊成が流罪で不在となった隙に姫を暗殺しようとした。しかし、姫は家来に助けられ菟田野の雲雀山（青蓮寺）に匿われる。

姫は3年後に狩りに来た父親（豊成）に発見され奈良に連れ戻され、13歳の時に中将の内侍となり、中将姫と呼ばれるようになった。16歳の時、栄華を望まない姫は仏に仕える決心をして、二上山山麓の当麻寺に入る。

当麻寺では、「百駄の蓮華の茎から繊維をとって曼陀羅を織るがよい」という仏の言葉を聞き、仏の助力を得て、一夜にして当麻曼茶羅（国宝）を織ったとされている。

29歳の時、生身の阿弥陀如来と二十五菩薩が現れて、仏道に精進を続けた中将法如を生きながら西方浄土へ迎えたといわれる。

毎年5月14日に行われる当麻寺の「練供養会式」は、この様子を再現したものである。

## \*終わりに\*

奈良市の世界遺産を中心に書いた。

奈良市内には他にも新薬師寺、白毫寺、柳生（滝坂の道、剣豪の里）、清澄の里（正暦寺、弘仁寺）、佐保・佐紀（法華寺、秋篠寺、佐紀盾列古墳群（さきたてなみこふんぐん））や映画「殞（もがり）の森」のロケ地：田原の里など素晴らしい所がいっぱいある。

1200年前の息吹の残る古き良き奈良へ、是非遊びにおいで下さい。

（ご希望でしたら、筆者がボランティアでガイドをします。）

（色染・昭35 坂東久平）

# 繊維と共に60年の回顧 (2)

## 研究から開発、生産、営業、貿易、企画調査

### 第4章 アメリカのビジネスと情報活動

昭和43年(1968年)に米国ニューヨーク駐在員を拝命し、4年3ヶ月間勤務した。当時は日本の高度成長時代が始まった頃で、活気に満ちていた。東レも自社製品の輸出販売を始めたころで、毎日が緊張の連続であった。また、先進国の技術をリサーチする役割も担い、まさしく出先機関としての役割を実感したものであった。とにかく、機能的で、効率第一の米国ビジネスの気分はいいが、旧態の日本的慣習から突然の転換で当初は多くの戸惑いも感じた。



(写真左) 東レアメリカ社のスタッフ一同 (新旧社長の交代記念パーティにて・1973年)  
(写真右) ユニファイ社 メベーン社長と記念パーティにて

世界の繊維産業をリードした米国のテキスタイル産業界のど真ん中に飛び込んで、業界のリーダーと接触した経験は、のちのビジネス、人生に多大の寄与が出来たものと確信する。

#### 一 技術サービス—ポリエステル加工糸の軌道化

在米の4年間は東レの繊維製品の販売サポートのための技術サービスにその主力を尽くしたものだ。その中心が当時、普及が最も注目されていたポリエステル加工糸のプロモーションであった。米国南部地方に数多く存在する有力加工糸ユーザーのサーキュラーニット工場へ大量のポリエステル糸を納入したので、その加工での問題点を調査して、本国へフィードバックするのが重要な仕事であった。当時、月間で4～5百トンの原糸が東レの三島工場から出荷されたので、客先での評価は非常に重要なフィードバック情報であった。世界的に見れば後発の日本の合成繊維産業が、まさしく世界のひのき舞台で活躍する時代に入りかけていた頃なので、背伸びをしていた時代である。当時の競合相手はデュポンのダクロンであり、そのネームバリューとの張り合いでもあった。東レも世界に伍して競って行く時代に入ったので、最大の関心を払い、技術担当の当時の谷村常務や三島工場の石田工場長始め、多くの技術幹部が現地観察に見えたので、アテンドするのは緊張の

連続であった。丁度その頃、半延伸糸の「POY」がデュポンにより開発され市場の話題をさらったのが記憶に残っている。当時の合成繊維の製造技術からすると「半延伸」というプロセスは常識を疑う新技術であったが、これが現実に市場に現れるのが技術革新の実態である。デュポンやICIなど世界のトップランクの企業は絶えず時代の先端を行く技術と製品を駆使して時代をリードしていくことが実感させられた。

## 一 日米繊維交渉時代

滞在中の1945年は急増する日本の繊維輸出の問題が顕在化し、日米の通商問題が沸騰した時代である。当時は日本の繊維企業の幹部が頻繁に訪れ、交渉が台頭していた時代であった。当時のニューヨークの化合繊維メーカーの企画、販売系の駐在員はこの問題に駆り出され、当時の化繊協会の幹部と頻繁にワシントンを訪ねていた。技術系駐在員は担当外であったが、時折、サポートに駆り出され、私もワシントンを訪ね、その片鱗を経験できたのは貴重な経験の一つであった。このストーリーは結局、当時のニクソン大統領と佐藤栄作首相の交渉で沖縄返還を条件に繊維が大きな妥協を強いられた結末であったこと記憶している。“糸を売って縄を買った”という語り草が当時をしのばせる。

## 一 ニクソンショックと360円時代の終焉

今では歴史的な語り草になっているが、敗戦後は日本の経済を再建するため、日本円は360円に固定されていた。これは日本の産業を復活させる有力なサポート策としてその効用を発揮した。逆に海外品やサービスを買う場合はその負担が大きい。米国の生活も当時の貨幣価値から4倍近く高かったものであった。現地では当時の日本のサラリーマンの給与の4倍くらいの額を受け取っていたが丁度バランスが取れていた。ところが日本からの輸出が伸びて、日本の経済が力をつけてきた1960年後半から貿易収支の黒字化が進み、交換レートがバランスをとれなくなった。1971年8月に当時のニクソン大統領は金との交換を停止して、いわゆるニクソンショックが発生した。為替レートはたちまち300円台を付け、さらにその後、円高が進行した。当時、海外で生活をしてきた者はたちまち手持ちの外貨の価値は暴落し、僅かながらの資産が目減りする被害をこうむった。その後、為替相場はどんどん円高傾向になり、200円台前後をつけるようになり帰国の時は大きな為替差損の被害をこうむった。その後の1985年、G5プラザ合意で当時の竹下登大蔵大臣の合意のもとさらに円高が進み、120円前後まで進み、現在の為替相場になっていった。為替は我々凡人には調整できるものではないが、それにしても市井の凡人が個人の懐を気にせねばならないくらい、これまで生活に影響を与えるとは思えない事であった。

## 一 先進国での先端技術調査

当時の海外駐在員の最大の役割は先進国の先端技術を探査し、日本の本社にフィードバックすることであった。私の場合では、アメリカの先端技術の研究とフィードバックであった。日常の情報活動が一刻もおろそかにできない環境であった。毎日業界誌に目を通したり、契約コンサルタントに情報を探索したり、東レの将来の技術レベル向上のためのフィードバックに誠心誠意尽力したものである。

ここで経験した思いでは、新しい情報というのは既成概念の予想をはるかに超越した現実遭遇することである。ここに私の2、3の経験と教訓を紹介する。

### a) 「POY」の出現

先に紹介したポリエステルフィラメント糸の拡販活動で経験した「POY」の出現は忘れられない経験である。当時は紡糸後の未延伸糸を後半の延伸工程で的確に延伸するのが基本技術として理解されていた。ところが、米国在任中の1968年頃から半延伸糸の「POY (Partial Oriented Yarn)」が米国で出回り始めた。「POY」にすれば加工コストはドラスチックに低減し、コスト競争力は増す。デュポン社が開発し、他の米国のメーカーが追従した技術である。既成の技術概念では「半なま糸」というのは安定した品質をつくるには、常識を超えた技術であり、当時の東レ技術陣の疑問を現地で受けたものである。今では中国を始め発展途上国でも常識的な技術である。教えられたのは技術は年々改良と進歩が加えられ進化していくもので、既成概念にとらわれない発想を絶えず持ち続けることである。

### b) 新技術製品「エアバッグ」

もう一つの思い出は、今をときめく「エアバッグ」開発の話題である。私が在任中の1970年頃、米国でシートベルトを超える安全装置として「エアバッグ」という装置が開発された情報が入ってきた。これを本社に報告し調査を始めてが、当時はこの情報を得て誰もがそんな衝突—衝撃—爆発—膨張などの複雑な機構を取り込んだ装置が普及するとは考えられないと、私も含めて懐疑的な対応であった。その後、40年以上の歳月が経過して、「エアバッグ」の普及は驚異的なものである。ナイロン66の主力用途になっている。東レ、東洋紡、旭化成は繊維の収益を支えている重要な製品に成長した。成長を支えた概念は「安全・安心」志向が支えているといえる。市場が成熟してくると技術の効率や先進性もさることながら、人類の本質的な概念が重要であるといえる。この意味で、最近の良く話題となる「健康とサステイナブル (持続的) な概念」も本質的なキーポイントであることを示唆するものである。技術と新製品は日進月歩、絶えず新しいものが出現することを肝に銘じて既成概念にとらわれないチャレンジ精神が肝要であること教えてくれた貴重な体験であった。

### c) 先進企業の調査

米国の繊維産業は現在も先進国の一端の優れた技術と経営を担った事業を呈しているが、当時は世界の繊維産業のリーダーとして位置していた。このような先進国の状況や実態を把握するため、本社からは調査チームや幹部が頻繁に訪れた。これらのアテンドが私にとっても貴重な体験であった。前田勝之助元会長 (故人) がまだ取締役就任する前、東レの高次加工を担当されていた頃、米国のトップメーカーの調査としてバーリントン社を訪問されたのが1985年であった。この時、現地でアテンドした記憶が思い出深い。

世界の巨大企業 デュポン社にも頻繁に訪問した。特に新しい繊維の開発の調査が最も集中した課題であったが、その他、当時、技術導入を進めていたスパンデックス糸“ライクラ”の研修と情報収集のため、ニューヨークから汽車で2時間くらいのウイルミントン

に通ったものである。“ライクラ”の加工研修のためデュポン社技術サービスセンターに1週間滞在した経験は単に研修の受講ばかりでなく、米国先進大企業の社内機構を身近に眺めたのは、得難い経験と後半のキャリアーに貢献したものであった。デュポン社は技術の最先端に行く自覚が社内の社員に徹底しており、社員の意識の高さをいたるところで感じ取られた。



(写真左) 前田勝之助元会長（左二人目）とバーリントン技術幹部、著者（右二人目）  
(写真右) デュポン技術サービスセンターにて  
(右より Mr. Huk（デュポン）、三木主部（当時）、筆者）

この頃の米国の繊維産業は比較的安価な労働力を求めて南部のカロライナ、ジョージア地方に移っていたので、私もほとんど毎週のように南部に出張したものだ。当時はバーリントン社やJPスチーブンスン社、デアリング・ミリケン社などのトップスリーはなかなか敷居が高く、対等に交流するような立場ではなく、その格差の大きさを感じていたものだった。当時はシャーロット市の近くの大手綿紡会社のスプリングスミルズ社やユニファイ社、大手ニットメーカーのジョナサンローガン社などへ通って、先進国のテキスタイル技術を実地で学んだものである。スプリングミルズ社は最近、ブラジルの企業に身売りされたが、ユニファイ社は欧州にも進出し、現在でもドローテクスチアード加工やリサイクル加工など手広く事業を運営している。ミリケン社も往年の威光は感じられないが米国のテキスタイルの健在ぶりを示す活躍をしている。

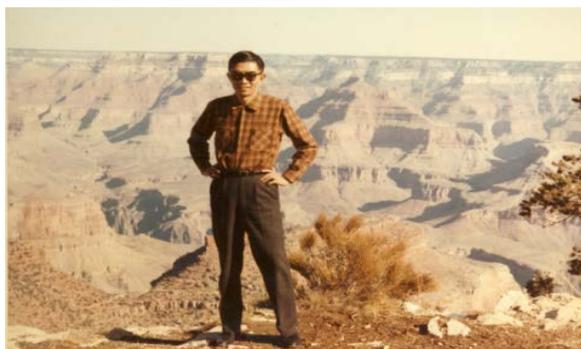
米国にはAATCCという染色加工の世界的な活動機関があり、毎年、米国の各都市で染色加工に関するシンポジウムを開催している。この会のメンバーであったので、アトランタやシャーロットなど南部の都市で開催されるシンポジウムには在任中は毎年出席して先端の技術情報を探知したものであった。

#### 一 ニューヨークの生活と米国各地の旅

ニューヨークには家族と共に4年3ヶ月間滞在した。毎日の仕事に追われながらも、この世界一エキサイティングな国際都市の生活をエンジョイした。マンハッタンのダウンタウンのジャズのライブハウスやリンカーンセンター、メトロポリタンオペラハウスにはよく観劇に出掛けた。また、スポーツがエキサイティングであった。住まいの近くのニューヨークメッツの本拠地、シェイ・スタジアムはアメリカンフットボールのゲームも開催され

てよく観戦したものである。当時はベトナム戦争の末期で米国も戦力の消耗の影響から、国内も退廃的なムードが漂っていた。ニューヨークの市内も治安が悪化して、夜の地下鉄などは緊張した空気が漂った記憶がある。しかし、仕事には容赦なく追われていた。

情報収集や技術サービス、内地の要人や会社幹部のアテンドで在任中は、米国各地を隈なくあるいたものである。米国51州の内40州は踏破したというのが自慢の一つであった。東の端のメイン州から西の端のワシントン州シアトル、カリフォルニア州のロスアンゼルス、サンディエゴまで米国を隅々まで歩いたのは貴重な経験であった。既にエスタブリッシュな雰囲気のある東部地域よりも、開発の進んでいた南部と、フレッシュな息吹を感じた西海岸の広大な米国の力量に魅力を感じたものであった。米国滞在や旅行記は枚挙に暇がないので写真を少々紹介してこの辺で止めておきたい。



(写真左上) ホワイトハウス前で (1968年)

(写真左下) グランドキャニオンにて (1970年)

(写真右) マンハッタンのパークアベニューを歩く

(続く)

(色染・昭31 米長 繁)

# 句集「徒然に生きる」より

平成27年春詠 作

## 「雪」

色あせし絵とも見紛う冬ざれの  
洛北野辺に白雪が舞う



## 「桜」



この年の花を待たずに友逝きぬ  
我れ生かされて花並木ゆく

一炊の夢にも似たる人の世に  
あと幾たびの桜吹雪か

## 「若き日の夢」

シャンゼリゼ春陽に映える白と黒  
魅せられ歩む若き日遙けし



(昭28年色染 西川三郎)

# 「妙法」の夢

東の空遙かに大文字が点り、やがて北の夜空に「妙法」の火文字が大きく浮かび上がってくる。

恩師 小西行雄先生はこの日もご自宅に近い加茂川堤に浴衣姿で立たれた。先生は繊維化学の世界的な学者である。そして草書にもご造詣の深い方でした。

「妙」の見事な流れる様な字形に何時も感嘆の声をあげられながら、「法」の活字崩れの様な字形には何故であろうかと、お気遣いの様子でした。

また、今でこそ左読みで「妙法」と読むが、当時右読みの時代に何故連読し難い「法」が書かれたのであろうか、こんな気がかりが先生の脳裏に夢の様に残されたのである。

或る日、先生から一通のお電話を頂いた。

「君は最近郷土史探訪に熱中のご様子、機会があれば、この二件も調べてくれませんか…」と。

かねてよりの思いもあり、私は早速に文献の調査に、そして地元の長老達をお訪ねしたのである。

妙法の送り火は お迎えした先祖の精霊を、再び浄土へお送りする宗教的な行事であり、八月十六日の夜 松ヶ崎「妙法」の火床に火がともされるのである。松ヶ崎は御所の米処として、荘園に禁裏農耕に、平安遷都を含め代々御所にお仕えし栄えた村である。

鎌倉末期 松ヶ崎に先住していた西村の住民は、村中が日蓮宗に改宗したことを祝って、日像上人の許で経文の一字「妙」を頂き、松ヶ崎西端の西山に火床文字を造成した。1306年のことである。

一方、少々遅れて移住してきた隣村東村は「妙」に遅れること約300年江戸時代初期に、同じく象徴文字「法」を頂き、日良上人の指揮で東山に火床を造成したのである。

両村には規模の差こそあったが、東村が造成に最も苦勞したのは、東山の狭隘と凹凸の大地、そして「妙」の恵まれた大地の傾斜に対して、その角度が余りにも低いことであった。火床に適当な場所が得られず当初は棒の先に松明を括り付けて燃やすケースも多かったと云われる。現在の火床数は「妙」の103基に対して「法」は63基である。

さて、「妙法」の連読であるが、当時は右読であり妙法とは読み様がない、左読になった天啓奇遇の結果「妙法」になったのである。

「法」もまた日蓮宗経文や法華の宗派に馴染む文字であり、村の一文字象徴として選ばれたのであるが。地元の人には「法華」の法から選ばれたことを殊更に強調される。「法華」は天皇賜号の宗号であり、宗派の正当性や元祖性が秘められている。300年待ち焦がれた村民がより高い象徴文字に強い希求があったとしても、それは決して不思議ではない、村の長老もこれを否定されなかった。

両村の関係に私の故郷近江の例を思った。先行して天秤棒を担いだ八幡商人と後発の五箇庄商人の間にはそれは厳しい競合の世界があったが、一方でまた親しく助けあって、あ

の近江商人の大道を全国に成し遂げたのである。

この夢の様な私の調査記録を当時喜寿間近の私から、米寿を越された恩師にお届けしたのである。

その後も私は機会を見て幾度となく「妙法」の火床を訪ね歩いた。資力にも恵まれず、村の家数も火床数と余り変わらぬ少ない人たちに依って、辛苦と情熱の中に造成を成し、夏祭りの伝統を継承し、その夜景を都人にも届けたのである。今になお生きて現世に貢献する偉大な文化遺跡を思った。

一方、私は今日のコンピューターなどの技術を用いて火床の位置を是正し、より美しい文字を京の夜空に輝かせる可能性を考えていた。流れるような「妙法」の二字がいずれの日にか京都の夜空に飾られるのであろうか、この夢の様な期待が私の脳裏にまた踊るのである。

送り火を終えた夜、村人は松ヶ崎山麓の涌泉寺の庭に集い「題目踊り」に夏祭りを祝った。現在も広い深淵の樹林に囲まれたこの庭に、両村の人はもとより近年に移り住んだ人達も仲良く交って踊りが弾んでいる。浴衣姿に団扇を手にする人の輪が幾重にも広がりながら。

単調な動作の踊りを南無妙法蓮華経の中で繰り返す「題目踊り」に夜は更けてゆき、思い出した様に打ち鳴らされる大太鼓の響きがまた静かに村の中にも響きわたって行くのである。この「題目踊り」こそは日本の盆踊りの始まりとも云われている。村の発行誌記録には徳治元年（1316）七月十六日の発祥が記録されている。

大地に生きる情熱と美しい自然に育まれた信仰の心が「妙法」の送り火と「題目おどり」を造り得たのであろう。古来日本の素晴らしい農村文化を見る思いである。発祥や継承の史に、なお多くの謎が残されるが、学びの中に際限のない夢が拡がるのである。

（昭28・色染 西川三郎）

#### 「追記」

当稿は或る文芸誌の寄稿要請に応じて執筆したものです。

云うまでもなく「松ヶ崎」はわが母校の所在地であり、松ヶ崎村は多くの同窓が下宿などで居住した懐かしい村です。

また「妙法」は八月十六日の夜母校の裏山に大きくその火文字が燈されますが、戦後、妙法両山の同時点火に母校グラウンドに点火を知らせる火床が設置される時代がありました。点火後学生たちはグラウンドにファイヤーストームを大いに楽しんだものです。

## 昭和29年色染率 クラス会

平成26年11月28日に京都駅前前のセンチュリーホテル内の「嵐亭」で、昼の12時より開催出来ました。

前回の時、酔の勢い?もあって、次回は1泊でやりましょうとの声を聞いたようですが、条件面等でなかなか難しく、残念ながら実現出来ず、今回も日帰りとなりました。

今回は6名と前回より更に1名減となり寂しい限りです。

でも、何かと楽しく歓談して、次回の世話役を今回に引き続き寺田君にお願いし、次回再会を願って夕方に解散しました。



前列右より、西村孝一郎、山方秀夫、梅本顕  
後列右より、芝山達雄、時岡嘉一郎、寺田昌平

## 昭和29年色染率 クラス会

平成27年12月7日、昨年と同じ京都駅前前のセンチュリーホテル内 「嵐亭」にて行ないました。残念ながら、昨年より1名減の5名と寂しいですが、お互いに遠慮もなく、楽しく語り合いました。



右より 梅本 顕 寺田昌平 山方秀夫 西村孝一郎 時岡嘉一郎  
(色染昭29・時岡嘉一郎)

## イロヨン会(色染昭和31年卒クラス会)

春の例会を平成26年4月8日宇治・亀石楼で開催しました。

丁度平等院鳳凰堂の改修や周囲の工事が完了し、サクラの花見時と重なり好天に恵まれ多数の観光客で賑やかでした。予想に違わず堂内拝観は2時間待ちという状態であったので庭内散策と宝物館見学の後中の島を経由して亀石楼に到着、宇治川に面した部屋から景色を楽しみながらゆっくりと昼食をとり懐旧談に花が咲きました。

(亀石楼は松下幸之助氏が愛人のために造った高級料亭で、宇治川に面し欄間など贅を尽くした数寄屋造りの建物です)

当日参加者は9名でした。

(色染 昭31・和田弘)



第11回 イロヨン会 宇治川畔にて

(写真左から湯川、井尻、和田、小阪、島谷、米長、中山、小倉、岡野)

## 平成27年度543会（昭和33年色染科卒）

平成27年9月11日関西543会は昨年同様、南海電車みさき公園前の「寿司よし」にて開催されました。

9月8日の天気予報で、台風18号9日近畿上陸と有りましたので心配しましたが知多半島へ上陸、11日は快晴の上天気になり、みさき公園まで淡路島の景色を眺め乍らサザン特急の旅が出来ました。

みさき公園駅では地元の平井さんの出迎えを受け、12時半から543会を開催。

今年は田村さんが欠席で、菱田さんが岡山から遠路参加されて6名出席でした。

紀淡海峡の新鮮な魚料理を賞味しながら、10か月ぶりの再会とて名産の鱧や近況よもやま話に盛り上がり夕方近く次回を期して閉会しました。



平成27年9月11日 関西543会 於・寿司よし（南海みさき公園駅前）

菱田三郎・平井雅夫・西山忠男・佐々木忠夫・井上雅雄・福田雍弘  
（昭33年・色染 井上雅雄）

## さんごかい 35会 (昭和35年春) クラス会

平成27年11月15日(日)に、「柚子の里水尾」にて恒例のクラス会を行った。

水尾は柚子の収穫期に入り、山は黄金の柚子で見事な佇まいをみせていた。健脚組は1時間早く現地に着し、山の中を歩き清和天皇社や園覚寺に参拝しました。(当初計画では、清和天皇陵に参拝をする予定だったが、前日の雨で山道の条件が悪くなっていたので、取りやめた。)

会場は「まる源」で、柚子風呂に入浴後、鳥の水炊きで楽しく話が弾みました。最高齢の山田英二さんが、ゴルフの腕を上げ、その内にエイジシュートを達成するとの意欲満々の宣言していました。(エイジ=英二)

常連の、法貴、衛藤の両君はそれぞれ公用で欠席、松本(繁)君は脚の調子が悪く、山歩きを敬遠し欠席されて残念でした。

懐かしい仲間との会話で時間の経つのは早く、来年の幹事を決めお互いに健康で再会を約し散会した。

(幹事は、鈴江&坂東でした。)



(参加者) 左から敬称略

後列：坂東、林、松木、安部田、鈴江、黒田

前列：山田、中村、園田、松岡

(色染・昭35年 坂東久平)

# 互和讃会 27 年例会 (S37 年卒)

10月7日(水)午後1時、JR宇治駅に遠路関東からも2人含めて14人が集まった。今年の互和讃会は、京都宇治に住んでいる又は住んだことのある柴田、三崎両君に幹事になって貰い、宇治、伏見を巡る会となった。

今晚宿泊する「花やしき浮舟園」の送迎バスで宇治平等院を訪れた。世界文化遺産平等院は、何と言っても10円硬貨にデザインされていることで有名だが、昨年春修復なり内部拝観が再開された国宝鳳凰堂(阿弥陀堂)が中心であろう。その鳳凰堂を一時間待って参拝した。



阿弥陀如来坐像

中堂に安置された本尊阿弥陀如来坐像は、往時(平安時代)の貴族が極楽往生を願って浄土教が流行した頃、時代屈指の仏師定朝により造られたもので、今日でも万民の心を癒す微笑が浮かんでいる様に思えた。



茶を点てる

次に平等院表参道にある三星園上林三入本店で、抹茶を点てる体験をした。我々の多くは初めての体験だったと思うが、この店の主の滔々たる話を(半分は自慢話の様に聞こえたが)聞きながら、自分で、臼で茶を挽き茶筌で点てて飲むというコースである。

この後中の島から宇治川を渡って、学問の神様として菟道雅郎子を祀っている為学業のお参りが多い宇治神社、その奥の宇治上神社を参拝した。日本最古の神社建築といわれ、世界文化遺産に登録されている宇治上神社の本殿、拝殿は国宝である。

再度宇治川を渡って戻り、待っていてくれた高井君と合流し宿へ向かった。

ゆっくり風呂で汗を流した後、宴会場で先ず既に亡くなった10人の旧友を偲んで黙祷してから、並べられた和風会席を食べながら酒を楽しんだ。宴会中各人の近況を紹介したが、殆ど話はやはり健康についてであった。多くが色々な病気を経験しており、これからの人生を如何に健康で尚有意義に過ごすかが話題の中心だった様に思う。宴会の後は、恒例の様に一つの部屋に集まって、幹事の柴田君に用意して貰ったビール、日本酒、焼酎にウィスキーで乾き物等のつまみで二次会を楽しんだ。わいわいと11時頃まで話は尽きなかった。最後に、来年の互和讃会は大阪在住の高井君中心に企画して貰い、場所は大阪近辺で決まった。

翌朝新たに参加した奥山君を含め16人で茶粥などの朝食を済まし、送迎バスで黄檗山萬福寺まで送って貰い、丁度縁日であったこの寺にお参りした。黄檗宗大本山の寺院で、開山は中国の隠元禪師、本尊は釈迦如来である万福寺は、中国風建造物であり建物、仏像の様式は元より儀式作法から精進料理に至るまで中国風で日本の一般的な仏教寺院と異なる。この寺には中華系の多くの人の墓があるそうである。



大雄宝殿（重要文化財）



開榎（かいぼん 又は魚榎）

この後京阪で中書島まで行き、ブラブラと歴史街道を歩いた。ここで大倉記念館を訪ねる。日本酒の醸造工程を見学し月桂冠の試飲、三種の酒の違いを味わった。又ブラブラ歩いて、幕末の志士たちの騒動があった寺田屋にも訪れた。志士達の志を書いた書が展示されており、乱闘を表す刀疵などを含め非常に生々しく思えた。



寺田屋

昼食は黄桜酒造のキザクラカップカントリーで摂った。表からは見えないが、中には勿論日本酒他のショップがあり、かなり広いレストランがある。小部屋もいくつかあって宴会も出来そうである。庭のカップの前で集合写真を撮り、散会となった。みんなで歩き、平日の昼間にもかかわらず多くの人で賑わっている大手筋通に驚きながら、京阪、近鉄それにJRと各々分かれて帰途についた。



写真左から 宮崎博、山中寛城、高井禎之、福西興至、阪口文雄、奥山正夫、池田晴充  
宮脇雄也、柴田二三男、三崎歩、中西藤司夫、市川喜代始、斉藤邦秀  
前列左から 岩坪正光、川崎登、筆者

（色染昭37年・山崎 治忠）

# 色染 38 年卒（みつば会）の近況報告

同窓の小島氏が国立新美術館南画院展に出品するという事で、平成 27 年 3 月 21 日（土）東京地区の同窓生で鑑賞会と懇親祝賀会を新宿三井クラブで開催した。集まったメンバーは出展の当人小島氏と東京近在の酒井, 三河, 渡邊, 鎌田, 中里, 石野, 早貸の合計 8 名。

小島氏の出展作品は『吹雪く』というタイトルで、格調の高い薄墨の F 1 2 0 号という事で「大型作品(194cm × 130cm)」である。作品の前で全員集合の記念撮影を行った。小島氏には弟子もいるらしく、弟子も今回受賞(京都府知事賞)していた。小島氏の案内と解説で 1 時間程他の作品も鑑賞した後、美術館を後にする。



前列左から、三河, 鎌田, 中里  
後列左から、早貸、小島、酒井、渡邊、石野

懇親祝賀会の会場、新宿三井クラブは、高層ビル内 5 4 F で絶景の夜景が楽しめる。1 年ぶりの再会であるが昔に戻り、喧々諤々の意見が飛び交った。耳が遠くなり理解不十分な点もあったが概ね次の通りであった。

先ずは、各人の健康状態から始まる。原因不明のふらつき現象と病院のはしご的移転、便秘とそれに対する秘法紹介、前立腺肥大問題、かすみ目等、やはり年相応の問題が出てくる。反対に水泳と卓球に力を入れている人も居る。次いでの話は、ボランティア的活

動で、パソコンの地域住民へのサービス活動、教育活動、町内の防災活動、2020年のオリンピック・パラリンピックへのボランティアでの参加目標等、奉仕の精神も充分見受けられた。我々の世代では大事なことである。繊維関係から離れられずボランティア的に講師をしている話もでた。自己啓発面では英語の勉強や大学の講座を聴講、古代史や現代史の歴史研究、国際交流問題研究など、対象テーマの幅が広い。多士済々でまだまだ老ける訳にもいかない年齢の様だ。

又、小島氏は今回の展示以外に、2013年秋、宮崎県延岡市で、昭和38年旭化成入社同期生が集い、入社50周年記念大会を開催した折、来賓の副市長から、建設中の市役所新庁舎に因んだ記念作品の制作打診を受け、同期生の応援を得て、制作をお引き受けすることになった。

そして、毎年、一夜だけ延岡城址で開催される「天下一薪能」の鑑賞から、暗闇の中に浮かび上がる古城の石垣を背景に、片山九郎右衛門師らが演じた「二人静」の舞台に発想を得て、制作の構想を固め、F80号の本作品「幽玄」は、2015年2月に完成させ収めた。



宮崎県延岡市の新庁舎に展示される「幽玄」

いろいろと話題は尽きなかったが、解散時間がアツという間に迫り、来年も元気であればと、次の再会を約して散会した。

この他に帰国時期が今回の懇親会に合わなかったが、タイで仕事をしている伊東がいる。彼は、タイの化学品輸入会社で技術面の相談役的な仕事をし、ゴルフを楽しんでいるらしい。いわば現役のサラリーマンである。4月に帰国するとのことなので、この時又皆で集まり、懇親会を開催しようと言うことで、別途タイの近況レポートを依頼することにした。

(色染 昭38・早貸正幸)

# 色染昭45年卒クラス会

平成27年1月3日に、毎年恒例の45年卒の色染クラス会を開催しました。

場所は昨年度と同じで、高辻壬生川(阪急四条大宮から徒歩10分)の「酒肴処しんざん」です。参加者も昨年と同じメンバーで6名でした。

料理は、“おせち”、“刺身”、“炭火焼き河豚”、“(熊)すき焼き”、“カニすき(雑炊付き)”の豪華フルコースです。刺身、焼きふぐ、カニも大変おいしかったけれど、兵庫(但馬付近)でとれたツキノワグマのすき焼きは、少し硬いだけで、脂も適度で絶品でした。なお、会費は飲み放題がついて1万円です。

出席者の近況：出席メンバー六名は、各々、仕事やレジャーで元気に頑張っています。

山本君は、工場を亀岡に移転しました。山本君が作ったプリント品がNHK「マッサン」に出ていたとのこと。堀田君は大阪工芸会の事務局長ですが、昨年、9日間のドイツ旅行にいきました。八木君は、FX(株)をやりながら、昨年ブラジルに2回行ってます。伝統工芸士の山田君は現役の社長です。嶋田は、日本繊維技術士センターの事務局長で、ゴルフでシングルを目指しています。西村は、中国の仕事の続けながら、町内会の役員で動いています。

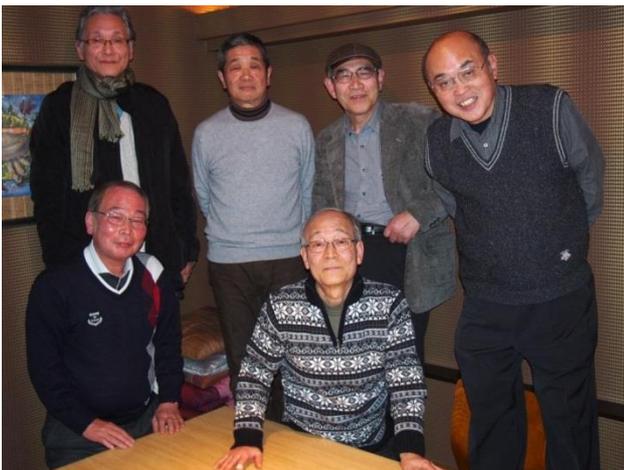
同窓生の消息や、大学の現況および業界・技術の状況など、話題は尽きませんでした。

同じ話を繰り返したり、話がかみ合わなかったり、だんだん年をとってきたと思われることもありましたが、全員パワフルに食べて、飲んで、おしゃべりしました。

午後四時半から始まり終わったのが八時過ぎでした。

(色染 昭45・嶋田幸二郎、西村元廣)

## 色染・昭和45年卒新年会



前列左から 嶋田幸二郎、八木哲雄  
後列左から 堀田英志、山田憲司、山本宗雄  
西村元廣



(熊)すき焼き”

## 色染昭50年クラス会

去る平成27年5月23日、3年ぶりに色染50会クラス会が開催されました。やはり京都の大学だったので、今まで京都での開催とし、同窓生の皆さんに懐かしがって頂こうという趣旨も盛り込んでいます。

場所は、四条烏丸近隣の町屋 錦庵というところでした。参加人数は、16名といつも通りたくさんのお出席があり、楽しく開催されました。

北は、東京在住者から南は博多在住者までの出席があり、遠くから参加されていていつも感激しています。ただ、少し残念だったのが、今まで毎回沖縄から出席してくれていた大酒飲み“Tくん”が参加できなかったことです。でも、久しぶりに合うと学生時代の感覚が戻ってきて若返った気分となり、みんなはしゃいでいました。

やはり同窓会はいいものです。みなさん大分年はとりましたが・・・。

(色染昭50・後藤康博)



(後列左より 熊見、後藤、石田、小澤、寺澤、柴岡、伊藤、松原)

(前列左より 松永、浜田、水野、松本、犬塚、阿久根、田原、橋本)

# 色染昭53年クラス会

## 年末恒例忘年会

平成26年12月30日に恒例の忘年同窓会を開催しました。午後4時より、おきまりの南森町、天満宮近くのパブハウス、キーストーンを借り切って開催されました。今年のトピックスは、何と言っても、毎年、浜松から新幹線で駆け付ける紅一点の西村嬢（旧姓 梶原）が旦那と二人で参加してくれたことです。西村君も同学の繊維学部の同学年の卒業生で、よく色染の研究室に、梶原さんを目当てに来ていたので、皆よく知っている仲なのです。例年通りの楽しい会なのですが、今年は、このパブハウス キーストーンが、近々閉店するかもしれないと、店長から聞き、少しブルーな雰囲気でしたが、皆の励ましで、店長も再考することでした。来年も ここで 同窓会が開けることを祈念して散会しました。  
(色染昭53・高橋伸和)



(写真なし 長井 前田 藤村 藤田 伊山 角 西村夫妻 高橋 9名出席)  
写真は キーストーンと店長

## 色染昭53年春季ゴルフ大会

平成27年3月14日 今回も富田林市にある、聖丘カントリークラブにて、ゴルフを楽しみました。今年も、8名の参加でした。天気予報では、朝のうち小雨で、プレーが始まるころには曇りから晴れ、日中は、晴天とのことでしたが、すごい雨男がおるらしく、なかなか天気は回復しませんでした。まだ、桜のつぼみは堅く、時折、真冬のような冷たい風の吹く日でしたが、久しぶりに会う同窓生もおり、皆、たのしい1日を過ごしました。日頃、会社の関係者と回るゴルフは気を使うが、このゴルフは、全く気を遣わなくてよいとの発言もありました。秋もやりたいねという意見もあり、また開催されることを祈念して散会しました。

(色染昭53・高橋伸和)



(写真 左前より田中 高橋 前田 長井 左後から 平林 藤村 伊山 銅子)

会員名簿

会員数: 216名

平成28年3月31日

4期: H26. 4~H27. 3

5期: H27. 4~H28. 3

▲は携帯メール ◎は会費納入済み

メール欄にマークの無い方でアドレスをお持ちの方は、事務局までご連絡下さい。

	卒業年度	氏名	メール	4期会費	5期会費
1	S19	小原 究		◎	◎
2	S19	宮永 正夫		◎	◎
3	S20	小黑 清明		◎	◎
4	S23	勝田 房治		◎	◎
5	S23	中川 益男	○	◎	◎
6	S26	水谷 昌史	○	◎	◎
7	S28	稲井 新郎		◎	◎
8	S28	田尻 弘		◎	◎
9	S28	西川 三郎	○	◎	◎
10	S28	萩原 理一	○	◎	◎
11	S28	吉岡 悠	○	◎	◎
12	S29	梅本 顕		◎	◎
13	S29	時岡嘉一郎	○	◎	◎
14	S30	井上 治彦	○		
15	S30	末包 光太		◎	◎
16	S31	井尻 三郎		◎	◎
17	S31	岡野 志郎			
18	S31	小倉 昭		◎	◎
19	S31	北川 全應			
20	S31	上妻 喜久男	○	◎	
21	S31	小阪 能一	○	◎	◎
22	S31	中山 茂		◎	◎
23	S31	安田 功	○	◎	◎
24	S31	湯川 謙吉		◎	◎
25	S31	米長 粲	○	◎	◎
26	S31	和田 弘	○	◎	◎
27	S32	太田迪夫	○	◎	
28	S32	坂井 武司	○	◎	◎
29	S32	阪田 昭藏	○	◎	◎
30	S32	塩路 貴		◎	
31	S32	原 栄	○	◎	
32	S32	松本 日出男	○	◎	◎
33	S33	阿部 弘		◎	◎
34	S33	井上 雅雄	○	◎	◎
35	S33	佐々木 忠夫		◎	◎
36	S33	佐々木 晶一	○	◎	
37	S33	白須 勝明	○	◎	◎
38	S33	平井 雅夫	○	◎	◎
39	S33	菱田 三郎			
40	S33	福田 雍弘		◎	
41	S34	大多和 正己		◎	◎
42	S34	後藤 芳弘	○	◎	◎
43	S34	佐藤 忠孝	○	◎	◎
44	S34	高瀬 進		◎	◎
45	S34	萩原 章司		◎	◎
46	S34	間 照夫		◎	◎
47	S34	藤井 敏昭	○	◎	◎
48	S34	甫天 正靖	○	◎	
49	S34	松本 哲哉		◎	◎
50	S34	横山 清一郎	○	◎	◎
51	S34	吉岡 泰男	○	◎	
52	S35	安部田 貞治	○	◎	◎
53	S35	飯井 基彦	○	◎	
54	S35	石部 信行	○	◎	◎

	卒業年度	氏名	メール	4期会費	5期会費
55	S35	衛藤 嘉孝	○	◎	◎
56	S35	大西 雄一	○	◎	◎
57	S35	黒田 亘哉	○	◎	◎
58	S35	鈴江 登	○	◎	◎
59	S35	園田 英雄	○	◎	◎
60	S35	中村 準市	▲	◎	◎
61	S35	林 俊郎	▲	◎	◎
62	S35	坂東 久平	○	◎	◎
63	S35	法貴 英夫	○	◎	◎
64	S35	松岡 謙一郎	○	◎	◎
65	S35	松木 雄一郎	○	◎	◎
66	S35	松本 繁男		◎	◎
67	S35	山田 英二	○	◎	◎
68	S36	市原 守		◎	◎
69	S36	奥 正夫	○		
70	S36	加藤 維希夫	○	◎	◎
71	S36	松本 光之助	○	◎	◎
72	S36	横山 隆		◎	◎
73	S37	池田 晴充		◎	◎
74	S37	市川喜代始	○	◎	◎
75	S37	岩坪 正光	▲	◎	◎
76	S37	奥山 正夫		◎	◎
77	S37	川崎 登也		◎	◎
78	S37	阪口 文雄	○	◎	◎
79	S37	佐原 肇	○	◎	◎
80	S37	柴田 二三男	○	◎	
81	S37	高井 禎之	○	◎	◎
82	S37	福西 興至	○	◎	◎
83	S37	三崎 歩	○	◎	◎
84	S37	山崎 治忠	○	◎	◎
85	S37	山中 寛城	○	◎	
86	S38	伊東 慶明	○		
87	S38	小島 堯	○	◎	◎
88	S38	小柳 健一	○		
89	S38	中東 弘三	○	◎	◎
90	S38	橋本 清	○	◎	
91	S38	早貸 正幸	○	◎	
92	S38	廣瀬 良樹	○		
93	S38	三河 明義	○	◎	
94	S38	森本 國宏	○	◎	
95	S38	渡辺 勝彦	○	◎	◎
96	S39	浅井 敬造	○		
97	S39	雨宮 邦夫	○		6期より
98	S39	今田 邦彦	○		6期より
99	S39	田中 邦雄	○		
100	S39	森下 公雄	▲	◎	◎
101	S40	鈴木 允子		◎	◎
102	S40	田中 興一	○	◎	◎
103	S40	内藤 隆	○	◎	◎
104	S40	安田 恵一	○	◎	
105	S41	梶原 俊明	○	◎	◎
106	S41	中尾脩一		◎	◎
107	S41	西岡 靖之	○		
108	S41	吉岡 啓	○	◎	◎

会員名簿

会員数: 216名  
平成28年3月31日

4期: H26. 4~H27. 3  
5期: H27. 4~H28. 3

	卒業年度	氏名	メール	4期会費	5期会費
109	S41	和田 明紘	○	◎	
110	S42	梅木 弘道	○	◎	◎
111	S42	北尾 三治		◎	◎
112	S42	高井 貢	○	◎	
113	S42	坂井 勝也			
114	S42	早藤 隆生			
115	S42	松原 昭夫	○		
116	S42	横山 彰夫	○	◎	◎
117	S43	今井 洋爾	○		6期より
118	S43	鈴木 嘉樹	○		6期より
119	S43	西村 佛二郎	○		6期より
120	S44	小谷 正夫	○	◎	
121	S44	藤本 昌則	○	◎	◎
122	S44	山平 知伸		◎	◎
123	S44	吉井 康浩			
124	S45	飯塚 志保	○		
125	S45	上田 善治	○		
126	S45	後藤 幸平	○	◎	◎
127	S45	竿山 重夫			
128	S45	坂本 修三	○	◎	◎
129	S45	嶋田 幸二郎	○	◎	◎
130	S45	西村 元廣	○	◎	◎
131	S45	堀田 英志	○	◎	◎
132	S45	堀口 祐司	○	◎	
133	S46	石田 泰和	○	◎	
134	S46	北尾 好隆	○		
135	S46	桑原 正樹	○	◎	◎
136	S46	小柴 雅昭	○	◎	◎
137	S46	成見 和也	○		
138	S46	樋口 郁雄	○	◎	◎
139	S46	米田 久夫	○	◎	◎
140	S47	大塚 滋	○		6期より
141	S47	菊井 順一	○		6期より
142	S47	小島 將春	○		6期より
143	S47	小林 繁夫	○		◎
144	S47	角野 幹夫	○		6期前納
145	S47	高木 恒男	○	◎	◎
146	S47	瀧本 哲雄	○	◎	◎
147	S47	田村 善弘	○		6期より
148	S47	福澤 佳計			6期より
149	S47	中村 妙子	○		6期より
150	S47	山口 繁雄			
151	S48	犬伏 康郎	○	◎	◎
152	S48	丹羽 章	○		6期より
153	S48	橋本 清保	○		
154	S48	服部 和正		◎	◎
155	S48	山本 博	○	◎	◎
156	S48	和田 有功			6期より
157	S49	大萩 成男	○		6期より
158	S49	西島 洋美	○	◎	
159	S49	吉田 理郎	○		6期より
160	S50	阿久根隆行			◎
161	S50	石田 俊平	○	◎	◎
162	S50	伊藤 青史	○	◎	

	卒業年度	氏名	メール	4期会費	5期会費
163	S50	小沢 七洋	○	◎	◎
164	S50	木下 修治	○	◎	◎
165	S50	熊見 孝彦	○	◎	◎
166	S50	後藤 康博	○	◎	◎
167	S50	柴岡 浩	○	◎	◎
168	S50	高野 良	○		
169	S50	寺澤 通隆	○	◎	◎
170	S50	中川 順之	○	◎	◎
171	S50	濱田 澄郎	○		
172	S50	松永 実	○		
173	S50	松原 美砂子	○	◎	◎
174	S50	松本 博	○	◎	◎
175	S50	水野 庸子		◎	◎
176	S52	白井 文朗	○	◎	◎
177	S53	伊山 正三	○	◎	◎
178	S53	高橋 伸和	○	◎	◎
179	S53	長井 寛彰			
180	S53	西村 千佳子	○		
181	S53	藤村 知男	○	◎	◎
182	S53	宮崎 義也	○		
183	S53	森川 滋明			
184	S53	山田 衛	○		
185	S54	柏原 俊博	○		
186	S54	清水 多佳子	○		
187	S54	清水 穂積			
188	S54	土井 謙吾			
189	S55	荒木 泰博	○		
190	S55	芝 泰清			
191	S56	中野 峰夫	○		
192	S57	荻野 毅	○		
193	S57	神野 友香子	○	◎	◎
194	S58	徳永 純子		◎	◎
195	S58	青木 伸治		◎	
196	S58	岡 修也	○	◎	
197	S58	垣田 直彦	○	◎	◎
198	S58	姫野 貴司	○	◎	
199	S58	藤上 和久	○	◎	◎
200	S58	宮原 雅彦	○	◎	◎
201	S59	穴迫 康之	○		
202	S59	島田 太朗	○		
203	S59	吉岡 崇	○		
204	S60	西内 誠			
205	S62	木村 由和			
206	S62	藤川 達志	○	◎	
207	S63	井藤 晶基	○		
208	S63	川端 利香	○		
209	S63	原 彰宏	○		
210	TS1	赤谷 宜樹	○	◎	
211	TS1	池上 俊			
212	TS1	貝増 匡俊	○		
213	TS2	阪上 智子	○		
214	TS4	中谷 昭彦	○		
215	TS5	中村 誠一	○	◎	◎
216	TS6	東光 勝也	○	◎	

## 編集後記

テロや難民等々、世界は不透明。国内でも生活実感では、まだまだ遠い景気回復。いつの時代も先は読めませんが、色染物質会は若干の会員増もあり、明るさが見えています。

会誌第7号をお届けします。皆様の積極的な投稿のお陰を持ちまして、豊富な内容となりました。

投稿された原稿は、時期が前後することもあります。これからも順次掲載していきます。

引き続き会員の皆様のご協力をお願い致します。

## 京都工芸繊維大学色染物質会事務局

〒610-0121 城陽市寺田今堀 108-15

TEL 0774-52-4909

MAIL [sikisen@matugasaki.com](mailto:sikisen@matugasaki.com)

URL <http://www.matugasaki.com>

色染物質会 会長 佐藤忠孝